



Title	北ロシアの結婚儀礼における若者の参加形態 : グリャザヴェツの買い取り儀礼と遊び
Author(s)	伊賀上, 菜穂
Citation	大阪大学言語文化学. 2000, 9, p. 239-252
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78035
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

北ロシアの結婚儀礼における若者の参加形態

— グリャザヴェツの買い取り儀礼と遊び —*

伊賀上 菜穂**

В свадебных обрядах Грязовецкого района Вологодской области мы можем наблюдать 3 формы участия молодежи: 1) причитания девушек и их помощь в подготовке даров невесты, 2) требование выкупа от жениха с элементами хвалы, ругани и угрозы, 3) послесвадебная посиделка (молодишник). Цель этой статьи — проанализировать структуру последних двух форм и выяснить их значение в обрядовой системе и причины возникновения различий между местностями.

В материалах 19-го века отмечается, что участие односельчан в свадьбе Грязовецкого уезда основано на половозрастных признаках. В день свадьбы каждая группа (мужики, парни, бабы, девушки и т. д.) требуют выкуп от жениха, показывая разные символы — “елку”, “зайца”, “рогозку”, “мяч” и “молчанку”. В посиделках же участвует преимущественно молодежь — парни и девушки. Обряд “выкуп с жениха” играет роль всеобщинной санкции на брак, а молодишник — только санкции от молодежи. Но эти обряды объединяет один общий фактор — наличие игрового элемента. В обряде требования выкупа “заяц”, “мяч” и “елка” используются как символы, обозначающие жениха

* *Формы участия молодежи в севернорусской свадьбе — требование выкупа и посиделки* — (Игауэ Нахо)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

или невесту. Жених (“заяц”) из другой деревни должен купить у членов общины невесты право выбрать себе жену (“елку”, “мяч”) из девушек, достигших соответствующего возраста. На молодежной посиделке молодоженам также дают групповую санкцию. В данном случае сами игры имеют важное значение: игры с целью выбора партнера в рамках свадебного обряда способствуют благополучному течению брачно-игрового цикла, связанного с календарем. В севернорусских материалах описания игр в свадебных обрядах встречаются редко, так как здесь обычно придавали большое значение обряду причитания на свадьбах, а также путали эти игры с обычными посиделками.

В Грязовецком районе, который расположен в ареалах 3-х символов — “елка”, “заяц” и “мяч”, — была развита система санкций от каждой половозрастной группы односельчан. А в некоторых местностях такие санкции выражаются в приговорах дружки, а также в отношении к сглазу и колдовству. В какой бы форме ни давали санкции, обе стороны — и молодожены и их односельчане — переутверждают свое положение в обществе в “пороговой ситуации” (liminality — Victor Turner). Социальные отношения регулируются через обряды.

1 はじめに

筆者は1997年夏に、ロシア共和国ヴォログダ州グリャザヴェツ地方¹⁾で行われたフィールドワークに参加し、1920-30年代の結婚儀礼について聞き取り調査を

¹⁾ グリャザヴェツ地方(旧・郡)はヴォログダ州(旧・県)南西部に位置し、コストロマ州、ヤロスラヴリ州と接する農業地帯である。鉄道は、ヴォログダーヤロスラヴリ線(1872年開通)とベテルブルクーヴァトカ(現キーロフ)線(1905年部分開通)が通っている。図1, 2 参照。

行った²⁾。以前指摘したように³⁾、ロシアの結婚儀礼では、贈り物の準備を手伝い、泣き歌を歌う娘たちに比べ、青年男子⁴⁾の役割が特定しにくい。ところがこの地方では、青年が花婿に買い取り金を要求したり、花婿が若者たちのために遊びの会を開いたり、結婚儀礼への青年の参加が多く聞かれた。筆者は初めその原因を、インフォーマントが幼少期に伝統的儀礼と接し、娯楽的要素に特に強い印象を持ったことに求めた。また儀礼の簡略化が、青年の役割の増加と関係していることも考えられた。しかし翌年参加したアルハンゲリスク州カルゴポリ地方の調査⁵⁾では、同村人としての青年の役割は、よくある道塞ぎしか聞くことができず、青年の参加の多さはグリャザヴェツの特徴であることが判明した。さらに19世紀末の記録により、この傾向が革命前から続いていることも分かった。

図1：ヴォログダ州地図

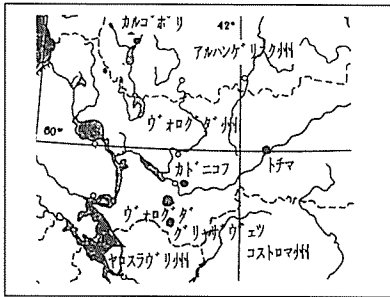
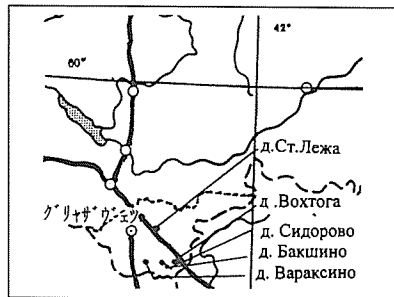


図2：グリャザヴェツ地方地図



地縁グループによる集団的承認の重要性は、通過儀礼の体系をまとめたヘネップ以来、十分認識されてきた⁶⁾。しかしながら若者の役割のこのような地域差は、どこから生まれるのであろうか。本研究ではその答えを求め、19世紀末から1930

²⁾ この調査はロシア科学アカデミー民族学人類学研究所の Кызласова И. С. 研究員を中心に、計5名で約2週間行われた。聞き取り調査の内容確認には、プーシキン名称ロシア語大学 Титаренко А. В. 研究員と、現言語学研究所院生 Палкин А. Д. の協力を得た。

³⁾ 伊賀上菜穂「帝政ロシア農村における結婚儀礼」『大阪大学言語文化学』vol. 5 (1996, 19-32) 参照。

⁴⁾ 青年男子は以下「青年」とする。「若者」という語は青年男女(青年、娘)の意味で用いる。年齢に関する用語の定義についてはp. 242参照。

⁵⁾ ロシア国立人文大学 Мороз А. В. 助教授指導の1ヶ月の民俗調査実習に、2週間のみ参加した。

⁶⁾ A. V. ヘネップ著、綾部恒雄、綾部裕子訳『通過儀礼』弘文堂、1995(1909)、pp. 99-124。

年代までのグリャザヴェツ儀礼における若者の参加形態を観察していく。結婚儀礼の参加者は大きく3つに分けられる。すなわち、当事者(二人とその家族)、招待客(званные гости, 親族、選ばれた隣人など)、非招待客(незванные гости, 主に同村人)である。今回は非招待客＝同村人としての若者(青年、娘)のみを対象とする。彼らの行為が他の参加者や時間・空間との関係の中で、どのように位置づけられているのか、その決定要因は何なのか。ヴォログダ州の結婚儀礼についての著作の多いグラ、若者と結婚の關係に注目してきた、ベルンシュタームらの研究成果を用いながら、北ロシアの中でのグリャザヴェツ儀礼の意味を考えていきたい。

2 グリャザヴェツの結婚儀礼

まず最初に、年齢を表す用語を説明する。農村では基本的に、男性は мужик (既婚男性)、парень (結婚年齢の青年・未婚)、мальчик (少年)、女性は баба (既婚女性)、девица, девушка (結婚年齢の娘・未婚)、девочка (少女)と分類されるが、使い手によって意味する年齢が異なる上に、молодой народ, ребятишка など別の言葉で言い換える場合も多い。以下日本語表記は次のように統一する。「少年」「少女」は若者の集まりに参加できる年齢に達していない者、「青年」「娘」は花嫁・花婿と同年齢で、集まりに参加している者、「男」「女」はそれ以上の既婚者である。ちなみに結婚年齢は、1920-30年代には男女とも20-25歳前後であった⁷⁾。19世紀末のディヤコノヴォ村では、青年は18-28歳まで、娘は16-22歳まで若者の集まりに参加していたが⁸⁾、これは結婚許容範囲と一致すると思われる。

それでは1997年のフィールドワークの結果から、1920-30年代のグリャザヴェツ結婚儀礼の流れを示そう。

1. 「出会い」青年の親や親戚、あるいは青年自身が花嫁候補を選ぶ。
2. 「結婚式前の儀礼」見合い(сватовство) → 結納(пропить) → 結婚式の準備

⁷⁾ 1997年の調査におけるインフォーマントの結婚年齢を基にした。

⁸⁾ См.: Архив Российского этнографического музея (далее АРЭМ), ф. 7 (фонд В.Н. Тенишева), оп. 2, д. 192. Каменев А. Волог. губ., Грязов. у., Авнегская вол., д. Дьяконово (1898), л. 1.

3. 「結婚式前日」娘たちが花嫁宅に集まって泣き歌(девичник)
4. 「結婚式の日」花婿が花嫁宅に到着 → 村ソヴェート(登録のため) → 教会(教会閉鎖前) → 花婿宅の宴会(красный стол, пир) → 床入り
5. 「翌日」二人を起こす → 花嫁の純潔調べ(冗談) → 皿または壺を割る → 花嫁に床を掃かせる → 花婿宅の宴会 → 花嫁宅への招待(отозмина, отгостки)
6. 「マースレニツァ(謝肉祭)」二人は花嫁の両親のところに客に行く(на барана)

グラの分析に基づけば、これは北ロシア結婚儀礼の基本構造と一致する⁹⁾。19世紀末の儀礼は上記と較べて「結婚式前の儀礼」の区分がより明確で、泣き歌や招待客の役割名がよく残っていた¹⁰⁾。若者を含む非招待客の参加はどちらの年代でも、1.娘たちの準備の手伝いと泣き歌、2.買い取り金の要求、3.若者を中心とした集まり、の3つに分類できる。今回はそのうち2と3について、革命前(表1)と1920-30年代(表2)に分けてまとめた。これらの表にそって、二つの参加形態を考察していこう。

2.1 買い取り儀礼

ここで言う買い取り儀礼とは、結婚式にやって来た村人たちが、花嫁自身、祝福、そして罵りや脅しの停止などの代償として、花婿に金銭または物品を要求する行為を指す。革命後のグリャザヴェツ(表2)では、次のような買い取り儀礼が行われた。花婿たちは花嫁宅に来ると、娘たちにお金や食べ物をあげて花嫁を渡してもらう。その後も娘達は「乙女の美 девья красота」という樅の木(елка)を宴会の席に運び込んだり、讃歌を歌ったりして、客からお金を集める。青年や男性(ребята, парни, мужики)は、「ナ・ログスク на рогозку」(ログスカ(粗布?)のために)と言いながら花嫁宅および花婿宅にやってきて、お金や酒をもらう。罵りしたり脅すだけのこともある。婚礼行列が教会に向かう時も、道が塞がれ通行料が要求される。本来道塞ぎは、花嫁の同村人(男女)が一回だけ行うものであったが、この原則はしばしば破られた。Вохтога 村とその近郊の

⁹⁾ См.: Гура А. В. Опыт выявления структуры севернорусского свадебного обряда // Русский народный свадебный обряд. «Наука», Л., 1978, ст. 72-88.

¹⁰⁾ 見合いから結納までの間は、だいたい сговор, смотрины, образовка に分かれている。девичник は сидины と呼ばれることもある。

表1：19世紀末の非招待客の参加形態*

資料	郷・村 (記録年)	結婚式前日	結 婚 式 当 日		結婚式翌日	それ以降
			花嫁宅	花婿宅		花婿宅
1	Авнэгская вол. (1898)	宴会の席で。男：“на рогозку”、青年(12-17歳)：“на меч”、娘：樅、少女：兎、女：“на молчанку”。			МОЛОДИШНИК (娘と女たちを招待)	
2	Жерноковская, Авнэгская вол. など (1898)		男、青年：на рогозку (花婿到着時、道にムシロ)。少年：мяч (宴会の席にボールを転がす) /他の郷の事例：兎、“на молчан”、“на меч”			МОЛОДИШНИК 花婿の村の青年、娘たちを招待
3	特定されず (1898)		男：“на рогозку” (花婿到着時道をふさいで)			
4	特定されず (1905)		テーブルの周りで。男：“на рогозку”、小さい子供：“на меч”、娘：兎・樅。 女：“на молчан”。			
5	参考例 ヴォログダ 郡 (1863)		客が席に着いた時、二人の隣人：“на мяч”。	花婿の村の娘と女が、宴会の初めに讃歌を歌う。	近隣の村の若者が集まり、最初別の、後に花嫁の家で遊ぶ。	

* “ ” で囲んだものは、言葉のみで実物が伴わない。表2も同様。

資料1：Архив Российского этнографического музея (АРЭМ), ф. 7 (фонд В.Н. Тенишева), оп. 2, д. 198. Кузнецов Я. Волог. губ., Грязов. у., д. Быково, Авнэгской вол.. 1898.

資料2：АРЭМ, ф. 7, оп. 2, д. 218. Староверов С. Волог. губ., Грязов. у.. 1898.

資料3：АРЭМ, ф. 7, оп. 2, д. 183. Голубцев. Волог. губ., Грязов. у.. 1898.

資料4：Волков И. В. Свадебные причеты, записанные крестьянином, часто бывавшим сватом // Живая старина, 1905, вып. I-II, ст. 203-225.

資料5：Александров В. Вологодская свадьба. СПб., 1863.

表 2 : 1920-1930年代の非招待客の参加形態

資料	村・インフォーマント (記録年)	結 婚 式 当 日			結婚式翌日
		花 嫁 宅	道	花 婿 宅	
6	д. Вохтога 28歳の女性 (1924)			娘：ハンカチの兎を客に投げて讃歌。男：二人と客をいすに乘せて揺する。	
7	д. Вохтога Королихина П.И. (1997)	娘：樞を飾る。		中年に近い男：“на рогозку”	娘：樞を売る。
8	д. Вохтога Рожкова А.В. (1997)	娘：花嫁を売る。 ребята：ドルーシカや二人を罵る。		ребята：ドルーシカと二人を罵る。娘：讃歌。	
9	д. Бакшино Трифонов А.Г. (1997)	青年と男：“на рогозку” (花婿をつねる)。		花婿は自分の村の若者ために家を借りる。	
10	д. Бакшино Радина Т.Г. (1997)	青年 (парни, ребята)：“на рогозку” (花婿が他村者の場合)。		花婿は親戚の家を若者達(他村者も含む)の集まりに貸す。	
11	д. Сидорово Китаева В.И. (1997)			娘：樞。客にハンカチを投げて讃歌。男：二人と客をいすに乘せて揺する。	
12	д. Ст. Лежа Токарева А.А. (1997)	娘：讃歌 ребята：買い取りを要求。			
13	д. Ст. Лежа Тихомирова Н.С. (1997)		道ふさぎ	娘：樞(払いが悪いとけなす)。	
14	д. Варакшино Большаков К.Г. (1997)	ребята：ドルーシカや二人を罵る。	道ふさぎ	中年の男、女連れ：“на рогозку”	

資料 6 : Свадебный обряд д. Вохтога Раменской вол. Грязов. у. Волог. губ. // Городок на Московской дороге. «Ардвисура», Вологда, 1994 (оригинал: Гос. Архив Волог. обл., ф. 4389, оп. 1, хр. 172).

資料 7 -15 : 1997年フィールドワーク調査より。

Сидорово 村では、花婿宅での宴会に男たちが女連れでやってきて、客を椅子にのせて強制的に祝う習慣があった。

革命後の記録では行為と時間・場所の関係が一定していないが、革命前の記録(表1)を見るとその規則性が明らかになる。娘たちの讃歌は花嫁宅、時に花婿宅でも歌われたが、樅の木は花嫁宅にのみ運びこまれる。その他の花婿側への金品の要求も花嫁宅で行われるが¹¹⁾、革命後と比較すると、訪問グループが年齢・性別で細分されているのがわかる。しかも「ロゴスカ рогозка」「ミャチ мяч (毬)」「ザイツ заяц (兎)」「モルчанка молчанка (沈黙)」と、グループごとに取り引き材料が決まっている。これは資料1と4に顕著である。そこでは娘たちの樅も含めて、それぞれのグループが順番に宴会の席を訪れ、金品を要求している¹²⁾。

買い取りの対象は実物(特に兎、毬、樅)で表される場合と、言葉だけの場合がある。ここでそれぞれの対象の意味を考えてみよう。娘たちと結びついた「乙女の美」(樅)は、娘時代＝花嫁の典型的な象徴であり、泣き歌のテーマでもある。北ロシアではリボンのことも多いが、中央ロシアでは木がよく用いられる¹³⁾。これに対し「兎」は花婿のシンボルである。グラによると兎(заяц)はスラヴ全体で男性の表象であり、結婚や性的関係を象徴する。ロシアの有名なホロヴォード「兎」は、娘たちの輪の中に立った一人の青年＝兎が、自分の舅、姑、妻の兄弟姉妹、最後に妻を選ぶという遊びで、グリャザヴェツでも盛んであった。結婚式に娘たちがハンカチから兎を作る習慣は、ノヴゴロド県東部、ヴォログダ県南西部(グリャザヴェツ含む)、ヤロスラヴリ県という、比較的狭い範囲で見られるという¹⁴⁾。

少年と結びつく「毬」については、ベルンシュタームが興味深い分析を行っている。それによると「ナ・ミャチ」(毬のために)という言葉は、ヴォログダ県南西部(カドニコフ、ヴォログダ、グリャザヴェツ、トチマ各郡)でのみ観察される。毬は花嫁の象徴と見なされることが多いが、19世紀中頃には、花嫁の親族や隣人が花婿から「毬代」または毬そのものを受け取っていたらしい。彼女はこれを、

¹¹⁾ 資料1の時間の違いは、普通結婚式当日に開かれる花嫁宅での小宴会が前日に行われることで説明できる。

¹²⁾ この地方で買い取り要求の対象に多様なシンボルが用いられることについては、モスクワ民族学人類学研究所 Макашина Т. С. 研究員から多くの助言を得た。

¹³⁾ См.: Гура А. В. Поэтическая терминология севернорусского свадебного обряда. // Фольклор и этнография: обряды и обрядовый фольклор. «Наука», Л., 1974, ст. 171-180.

¹⁴⁾ См.: Гура А. В. Символика животных в славянской народной традиции. «Индрик», М., 1997, ст. 177-179.

かつてペトロの日(旧暦6/29)やクリスマス週間にあったパートナー選びを目的とした毬遊びの名残と考えている¹⁵⁾。表1と表2を較べると、グリュザヴェツでは「毬」が「ロゴスカ」より早く消えているが、それは「毬」に幼いイメージが付与されていたせいだろう。「ロゴスカ」という言葉については、ベルンシュタームが「布＝寝具」と解釈しているが、資料2では人々は「贈り物の下に敷く布」と解釈しており、元の意味は明確ではない¹⁶⁾。

娘や青年とも結びつく兎や毬を、グリュザヴェツでより年少者に割り当てているのは、年齢・性別カテゴリーを細分化して年齢の違いを強調するためだろう。女たちの言う「ナ・モルチャンク」(沈黙のために)は、まさにこの区分に加わるために考案されたと思われる。というのはその命名法が他の4つとは明らかに異なるからである。「沈黙＝花嫁の悪口を流さなかった」を意味するこの名称は、ロゴスカや毬を要求する男性が追加的に言う「ナ・チェスチ」(花嫁の名誉を守ってきたことに対して)や「ナ・ヴィノ」(酒のために)と同じように、具体的解釈を表しており、後世のものである可能性が高い。

2.2 結婚式後の集まり

1997年の調査では、若者の集まりとしては同じ村の2例が報告された(資料9, 10)。これは花嫁が主催するもので、花嫁宅での宴会と重なっている。他の村でも客から集めたお金で *посиделки* (以下「夜会」)を開いたそうだが、時間が特定されない。19世紀末には、結婚式の翌日とそれ以降に *молодишники* という名で2例記録されている(資料1, 2)。その名は新郎新婦(*молодые*)のための集まりを意味しており、これが終わると二人は日常生活に戻る。資料1では花嫁宅に娘と女たちが手仕事をもって集まり、二人からお菓子や酒の御馳走をうけた後、輪になって歌いながら村中を歩く。資料2では、花婿の両親が適当な日に花嫁の両親、親族、花婿の村の若者を招待する。若者たちは多くの見物人の前で歌ったりホロヴォード(輪舞)遊びをしたりする。グリュザヴェツ郡に隣接するヴォログ

¹⁵⁾ Бернштам Т. А. Мяч в русском фольклоре и обрядовых играх // Фольклор и этнография: у этнографических истоков фольклорных сюжетов и образов. «Наука», Л., 1984, ст. 162-171. 資料5, ст. 73-74も参照。

¹⁶⁾ ロゴスカの意味については 1. ムシロ、布(рогожа)、2. 言い争い(рагоза)、3. お金(рага。フィンランド語の“raha”から)の、3つの可能性がある。См.: Даль В. Толковый словарь живого великорусского языка «Терра», М., 1995 (1880-82), “рогоза”; Фасмер М. Этимологический словарь русского языка. «Прогресс», М., 1971, “рага”, “рагоза”, “рогато”, “рогожа”。

ダ郡の1863年の記述にも、結婚式二日目の若者の集まりが含まれている(資料5, p. 87)。近隣の村々から集まった若者たちは、新婦の実家に新郎の親族が来ている間別の家で夜会をして待ち、夜中に客が帰ると新婦の家に場所を移す。新郎新婦も最後の機会として踊ることが許されたという。

2.3 年齢原理と承認の形

革命後の儀礼ではすでに多くの原則が崩れているが、19世紀末の記録からは、グリャザヴェツの非招待客の参加形態が年齢・性別原理に基づいていたことがわかる。結婚式当日に花嫁宅に来るグループは、性別と適齢期前・適齢期・既婚の違いで分類されている¹⁷⁾。結婚式後の集まりに参加するのは、資料1の女たちの例外があるが、ほぼ青年、娘に限られる。花婿宅での祝福は、革命後の資料によれば、花婿の村の既婚者がメインとなっている。ここから次のパターンが読み取れる。花嫁の村からの分離には全年齢グループが、花婿の村への統合はこれから二人が加入する既婚者グループが、そして結婚式後の再確認には若者や花嫁の村の女が関わる。つまり買い取り儀礼は、儀礼の中心＝クライマックスに行われる全共同体的承認の場であるが、結婚式後の集まりは、若者の間だけの二次的な承認なのである。だがこの二つには遊び *игры* の要素を含むという共通点もある。以下、遊びと共同体承認に分けて同村人の参加の意味を分析していく。なお花婿宅での祝福は19世紀末の記録がないので、今回はこれ以上追究しない。

3 結婚・遊びのサイクルと若者

買い取り儀礼では、花嫁・花婿選びをモチーフとした遊び(兎、毬)、または樅が独身者のメタファーとして用いられ、そこからの花嫁・花婿の分離が表現された。全共同体承認が若者の遊びと結びつくのは、結婚適齢者、特に花嫁資源の管理が共同体全体の問題であったからだ。若者の遊びのサイクルは、農耕や労働、暦上祭と深い関係を持っている。それは春、復活祭のホロヴォード *хоровод* で始まり、冬季の夜会 *посиделки* を経てマースレニツァ(謝肉祭)で終わる。このサイクルは結婚の成就を目的としているが、若者の間だけで閉じてはいない。遊

¹⁷⁾ もっとも男性と未婚女性、既婚女性の境界は明確だが、少女と娘、少年と青年、男性の区別はない場合もある。

びの中で二人が知り合い結婚の約束をすることもあるが、大人たちにとっても遊びの会は息子の見合い相手を探す場であり、「花嫁の市場」の機能を果たしていた¹⁸⁾。

買い取り儀礼と比べ、若者の集まりは遊びとさらに直接的な関係を持っている。新郎新婦(またはその両親)が若者のために遊びの会を開くのは、若者仲間から自らが脱退、または立場を変えて再加入することを、彼らに承認してもらうためだった¹⁹⁾。では若者たちがそこで行う遊び自体は、どんな意味を持っているのだろうか。ベルンシュタムによると、若者の集まりは自然の成熟に比例して結婚色を強めていく。そこで行われる遊びは、春の出会い、夏の結婚、秋からの家族生活(夫、妻)と、そのテーマを変える。そして最後の家族生活=夜会は実際の結婚シーズンと一致して、遊びと現実が重複する²⁰⁾。モロゾフも結婚儀礼の枠内の遊びに注目し、暦の中に見られる結婚色が、かつて結婚儀礼が暦と関連していた名残ではないかという仮説をたてている²¹⁾。このように遊びと結婚のサイクルが密接に関連しているならば、結婚儀礼の枠内で行われるホロヴォードやパートナー選びも、ただの冬の夜会との混同ではなく、結婚・遊びの年間サイクルに組み込まれた要素と考えられる。つまり結婚儀礼枠内の遊びは、参加者たちの結婚を促進する機能を持つのだ。この機能の作用には2種類のものが観察できる。一つ目は呪術力であり、本物の結婚が遊びの結婚に及ぼす力(いわゆる「類感呪術」)と、他の娘の結婚を早める花嫁の力(「感染呪術」)が、参加者に影響を与えるというものだ²²⁾。2つ目はより实际的なものであり、花嫁と花婿の村やその周辺地域の交流がおこり、娘が自分を披露する機会が増えることである²³⁾。以前筆者は青年の遊びへの参加を、儀礼を活性化させる触媒機能と考えた²⁴⁾。今回

¹⁸⁾ ホロヴォード遊びの持つ花嫁候補選びの側面については、次を参照。Климов А. Основы русского народного танца. «Искусство», М., 1981, ст. 48-49. グリャザヴェツの夜会は、посиденка, беседка, повода などと呼ばれ、ディヤコノヴォ村(註8参照)では、他の村の者たちも、子供から老人まで見物にやって来たという。См.: АРЭМ, ф. 7, оп. 2, д. 192, л. 1. 革命後(資料6, ст. 257, 資料12, 14のインフォーマント)には、夜会で知り合った二人が結婚の約束をする例が増える。この場合娘は青年に約束の品(заклад = 担保)を渡す。

¹⁹⁾ 結婚が若者仲間からの離脱を意味するかどうかは、地域によって異なる。また出産までの間(結婚後1年くらい)、新婦が集まりに参加することを許可する例は多い。См.: Громыко М. М. Традиционные нормы поведения и формы общения русских крестьян XIX в. «Наука», М., 1986, ст. 224-225.

²⁰⁾ См.: Бернштам Т. А. Молодежь. «Наука», Л., 1988, ст. 230-248.

²¹⁾ См.: Морозов И. А. Женитьба добра молодца. «Лабиринт», М., 1998, ст. 12-13. この中で著者は様々な遊びの中の結婚のモチーフと、その意味を分析している。

それを「花嫁、花婿を新しい身分に送ると同時に、暦と結びついた結婚サイクル自体を前に進める機能」と訂正したい。

ヴォログダ県北部では、若者の集まりは結婚式前に行われていたが、これはグリャザヴェツと同じ働きを持つものと考えてよいだろう²⁵⁾。だが北ロシアの他の地方では、結婚儀礼の中の遊びが記述されていないことが多い。その理由として、これらの地域で結婚式の泣き歌の比重が高いこと、観察者・当事者ともに、日頃の夜会と儀礼としての遊びの区別ができていないこと、の2つが考えられるが、現時点では断定できない。グリャザヴェツの革命後の記録からは、結婚儀礼と遊びのつながりが希薄になっていく様が観察できた。「遊びの脱儀礼化」は容易に起こり得る。

4 共同体の承認

グリャザヴェツは兎や毬、樅の文化圏が重なって、年齢・性別買い取り儀礼を発達させたが、このように公的承認が明確に現れる地域は珍しい。他の地域では全共同体的承認は、どのような形で与えられたのだろうか。

まずはグリャザヴェツで顕著な年齢・性別原理について考えよう。この原理はロシアの儀礼体系の基礎をなすもので、全共同体の参加を強調する場面、例えばクリスマスや復活祭頃の門付けで時々見られる²⁶⁾。中でもヴォルガ川中流域地方の新婚夫婦への門付け「выюнишники」は、古い特徴を残すことで有名だ²⁷⁾。グリャザヴェツでは年齢・性別の原則はただ古層の残照ではなく、19世紀末から20世紀初頭にかけて強化されている。それは共同体内部における比較的若い層の地位の向上を意味するとともに、産業革命等の社会変化によっても共同体的地縁

²²⁾ 呪術の種類については J. G. フレイザー著、永橋宅卓介訳『金枝篇』（岩波文庫、1951-52（1890））を参照。花嫁の力としてよく知られているものに、花嫁が風呂で使った水で顔を洗うと早く結婚できるというものがある。花嫁は友人の結婚を故意に遅らせることもできる。См.: Балашов Д. М., Марченко Ю. И., Камыкова Н. И. Русская свадьба. «Современник», М., 1985, ст. 132, 254.

²³⁾ もっともこの効果は、結婚の準備や девичник でもすでに発揮されている。

²⁴⁾ 伊賀上(1996) p. 30参照。

²⁵⁾ См., например: Едемский М. Б. Свадьба в Кокшениге Тотемского у. Волог. губ. // Живая старина, №19, вып. 1-4, 1910, ст. 1-137; АРЭМ, ф. 7, оп. 2, д. 334, Капустин через Суверова, Волог. губ., Сольвычегодский у., 1898.

²⁶⁾ См.: Тульцева Л. А. Община и аграрная обрядность рязанских крестьян на рубеже XIX-XX вв. // Русские. «Наука», М., 1989, ст. 45-62.

関係が保たれたことを示している。結婚儀礼から外部者が減っていくのは、農業集団化以降のこととなる。他の地域、たとえばコストロマ県キネシムスキー郡では、年齢・性別グループの存在はドルーシカの口上によって浮かび上がる。結婚式当日は花婿、花嫁宅とも見物人であふれるが、ドルーシカは年齢グループの特徴を皮肉っぽく描写しながら、子供、娘、男たち、若い女や老人に、順番に祝福を請うている²⁸⁾。

年齢・性別原理は明確に表現されないが、呪術も公的承認の働きをする。第1章で触れたカルゴボリは呪術色の強い地域であった。北ロシアの結婚儀礼では邪視(сглаз)と呪術師(колдун)が恐れられる。結婚式当日の婚行列が特に危険で、被害は当事者二人だけでなく客全体にも及び得る。呪術的攻撃への対処は、呪術による防御と、金品と言葉による懐柔があり、特に後者はドルーシカの仕事である。彼は柱やベチカの横、天井の寝床などにいる者に気を配り、酒をご馳走して、いるかもしれない悪意の持ち主の機嫌をとる²⁹⁾。買い取りに比べ、呪術への対処は不特定者に対するアピールとなるが、懐柔であれ防御であれ、共同体の負の感情を均して承認を取り付ける行為である。

買い取り儀礼の場合、呪術をかけられる危険ゾーン、そしてドルーシカが見物人に祝福を求める場合は、時間的にも空間的にも重複する。それはまさに分離と統合の境界(liminality)と一致している。ターナーはリミニリティの主要な型として、身分昇格と身分逆転の儀礼を挙げている³⁰⁾。結婚儀礼は身分上昇の儀礼であり、二人は普通にないほどの低姿勢を要求されるが、同時に二人が公、公妃と呼ばれて丁重に扱われるなど、身分逆転の要素もある。ターナーは「身分逆転の儀礼は、その象徴類型や行動類型のうちに、本質においても相互の関係においても自明で不変なものとする集団形成の社会的範疇や形式を可視的なものにする」(P. 250)と述べるが、これはドルーシカの皮肉に端的に表れている。呪術及び公的

²⁸⁾ Тульцеваによるとこれは復活祭後最初の土曜日に行われ、子供から大人の男性までの年齢・性別グループが、順番に新婚夫婦を訪問してご馳走をもらう行事であった。グループごとに決められた訪問時間や共食、古いシンボルを含む歌など、その古さをうかがわせる要素が多く見られる。См.: Тульцева Л. А. Выюнишники // Русский народный свадебный обряд. «Наука», Л., 1978, ст. 122-137.

²⁸⁾ См.: Шейн П. В. сост. Великорус в своих песнях, обрядах, обычаях, верованиях, сказках, легендах и т. д. СПб., т. 1, вып. 2, 1900, ст. 687. 伊賀上「ドルーシカとは誰か」(『大阪大学言語文化学』vol. 7, 1998, 5-19) P. 10に記述あり。

²⁹⁾ См.: Шейн (1900), ст. 700-729. ニジニーノヴゴロド県マカリエフスキー郡の例。

³⁰⁾ V. W. ターナー著、富倉光雄訳『儀礼の過程』新思案社、1996(原典1969)、pp. 235-294参照。

な年齢・性別承認で当事者たちに試練を課す者たちもまた、社会規範の中での自分の位置を問い直されるのだ。

5 まとめ

以上見てきたように、グリャザヴェツの若者の非招待客としての参加形態には、幾つかの層位があった。

- I 全共同体的承認 —— I a 公的、積極的承認
 - I b 呪術を通しての消極的承認
- II 若者仲間の承認 —— II a 遊び
 - II b 娘たちの泣き歌(部分的³¹⁾)

若者は年齢・性別グループの一つとして買い取り儀礼に参加することで、全共同体的承認に加わる(I a)。また当事者が催す夜会に参加して、花嫁・花婿が属するグループ内部の承認も与える(II a)。これらの承認の中の「遊び」は、若者たちの結婚を促進するが結婚を機に放棄されるべきものとして現れ、花嫁・花婿だけでなく若者たちにも、年齢グループの階段を登っていく「義務」を確認させる。さらに「遊び」の当事者でない者(既婚者と子供)もそれを「若者時代」のメタファーとして扱うが、そのことによって「遊び」の持つ上記のような働きが、共同体全体によって管理されていることが強調される。

今回の観察では、若者の参加が明示されない地域でも二種類の承認(I, II)が存在することが確認できた。参加形態の地域差はa、b二つの表現の比重差から生じており、そこには文化圏の問題も大きく関わっている。だがそれ以外に当事者や招待客との相関関係、つまり、招待客や親族が非招待客を含む年齢・性別集団を代表するというパターンの存在も考えられる。今回検討しなかったグループも含め、全体としての年齢・性別構造を考察していく必要がある。

³¹⁾ 花嫁の死と再生に係わる泣き歌は複雑なシステムであり、若者間だけの承認とはいえない。